

“統合医療の世界の動向”

有限責任中間法人日本統合医療学会(IMJ)

理事長 渥美 和彦

統合医療とは、近代西洋医学を軸として、伝統医学や相補代替医療を利用して、患者中心の医療を行うものである。

この概念は、古くより医療の理想とされていたが、現代の西洋医学が進歩して、限界に達したために、技術的にも、方法論的にも可能となった。

さらに、最近では社会・経済的にも、さらに、民族および地域を超えて必要とされることが判り、その実現に向かって世界の医療界は、大きく転換し結集しつつある。

統合医療は、身体、精神、社会、霊性などを含めて全体医療であり、治療のみならず、予防・保健を含むものであり、ヒトが生れて死ぬまでの包括医療である。(表(1))

この統合医療の流れをつくったのは、1990年頃のハーバード大学のアイゼンバーク教授、あるいは、アリゾナ大学のワイル教授らの発表および発言である。

米国の議会はこれらの発表に刺激されて、統合医療の重要性を認識し、将来の医療像として、国策として推進してきた。

すなわち、NIHを支援して研究費を配分し、米国内に15ヶ所の統合医療センターを作り、教育、企業をも巻き込んで支援してきた。

NIHの中に、国立相補・代替研究所が設立され、その研究予算は2005年で、年間400億円を超えている。(図(1)(2)(3))

この米国が国をあげて統合医療を推進する理由は、一体、何か？それは、

- 1) 国民の多様なニーズに応える。
- 2) 医療費の節減をはかる。
- 3) 未来のヘルスケアの在り方を求める。

などである。(表(2))

わが国においても、最近統合医療を標榜するクリニックや、企業などが散在し、マスメディアにおいても、統合医療の記事が多くなっているが、それらのほとんどが商業的な目的が多く、その内容の多くは誤解されている。そもそも、統合医療は、簡単に実現できるものではなく、確固たる西洋医学の大学やセンターが中心にあって実現し得るものである。

その典型モデルとして、米国のスクリップスクリニック、アリゾナ大学、ドイツのエッセン大学、ベルリンのハーベルヘーエセンターなどをあげることが出来る。

沖縄に設計された統合医療センターを、図(4)に示したが、このデザインにアラブ連合のドバイが大きく関心を示し、現在、その実現について検討がすすめられている。著者は、本年3月、ドバイの要請により訪問したが、5月にも再度、訪れて、具体案を検討することになっている。

世界では、統合医療の国際会議の欧米、アジアで行われ、研究者も終結しつつあり、そこでは、相補・代替医療から統合医療への転換が討議され、本年11月にはベルリンで“第1回ユーロ統合医療学会”が開催されることになっている。

わが国は、この統合医療の分野においては、学術的にも、行政的にも、著しく遅れをとっていたが、最近、統合医療を推進する学術連盟、議員連盟、文化人、企業団体が組織されたが、近々、市民会議が結成されて、四位一体で推進されることになっている。(表(3))

今回の講演では、ヨーロッパの現状、特にイタリア、ドイツ、北欧などの現状を述べた。医科大学には、統合医療学科が設立され、教育および研究が行われているし、病院や医療センターでは、統合医療部門が開設され、鍼、カイロプラクティック、マッサージ、ヨーガ、気功、水力療法、ハーブ療法、温泉療法、音楽療法、絵画療法などの臨床が行われ、これらの分野の療法士の研修、養成が盛んに行われている。

統合医療の分野で、最も進んでいるのは米国であり、次いで、カナダである。ヨーロッパでは、米国と独自のCAMおよび統合医療が展開されており、日本は米国よりもヨーロッパの方が、参考になると思われる。

わが国では、二大政党が政争を最大目標として、国民に未来の国家像を提示することもなく、重要政策を討議することもなく、貴重な時間を浪費しており、その国家的損失は計り知れないものがある。

統合医療をすすめる前提として、健全な政治社会を日本に構築するのが緊急ではないかと考える次第である。

最後に、近代西洋医学がすすんだために、その結果、CAMや伝統医学が再評価されるようになった。

図(4)の右側に、遺伝子科学と再生医学の進歩が、従来の治療中心の医療から、

予防、健康中心の医療へ転換することを示している。

左側には、近代西洋医学と CAM、伝統医学が統合され、統合医療になることを示している。

この両側の展開が、医療の究極の目的としてのトータル・ヘルス・ケアシステム（渥美和彦提案）へすすむことを示している。

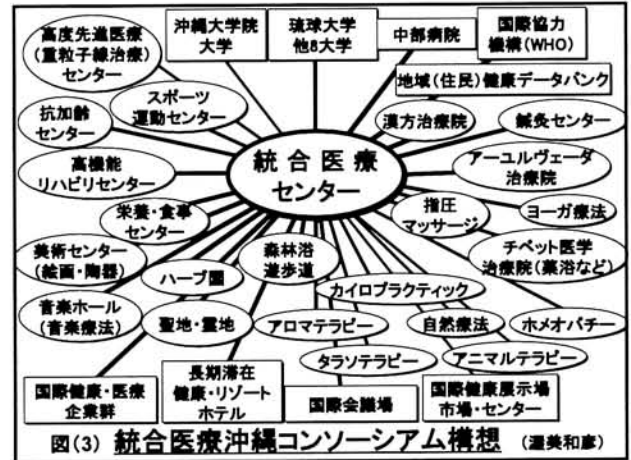
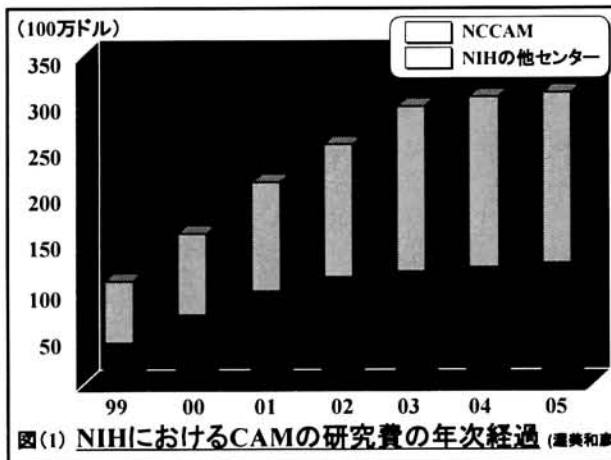
以上、同表を中心として、統合医療についての世界、および、わが国における取り組みを述べた。

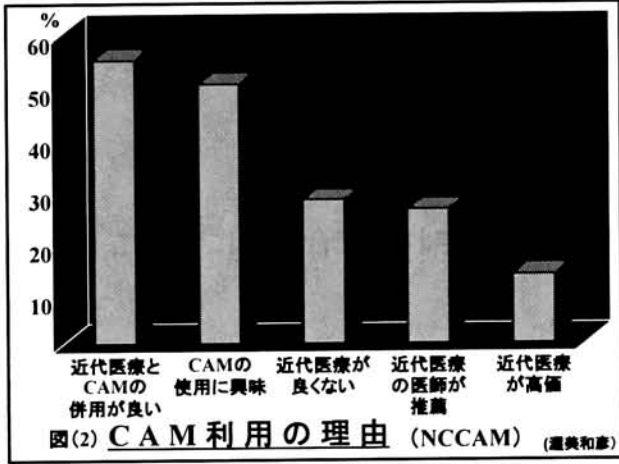
表(1) **統合医療の定義** (渥美和彦)

<p>•患者中心の医療</p>
<p>•身体・精神(心理)、社会(環境)、霊性(魂)を含めた全体医療</p>
<p>•治療のみならず、疾病予防、健康維持、長寿の医療(抗加齢)</p>
<p>•生まれて、死ぬまでの包括医療(生病老死)</p>

表(2) **米国国立健康研究所(NIH)のCAM利用研究の推進理由** (渥美和彦)

<p>1)国民の多様なニーズにこたえる。 (近代西洋医学のみならず、伝統医学、代替医療の利用)</p>
<p>2)医療費の節減をはかる。 (TM/CAMの費用は1/5~1/10に)</p>
<p>3)未来のヘルスケアの在り方を求める。 (治療の医学より、予防・健康の医学へ)</p>





表(3) 日本は統合医療に対して開国寸前である (2005年9月) (瀧美和彦)

- 1) 国民が相補・代替医療(CAM)に関心をもつようになり、マスメディアがCAMに注目し始めるようになった。
- 2) 医学教育において伝統医学(TM)やCAMのカリキュラムが検討され、医学研究においてCAMのテーマが増加し始めた。
- 3) 統合医療を推進する学術連合が発足した。
- 4) 統合医療を実現する議員連盟が発足した。
- 5) 統合医療を実現する民間団体が発足した。

